ピアノ音楽史で見る服飾の歴史

岳本恭治（ピアニスト、音楽ジャーナリスト）

なぜ人間は服を着ているのだろうか？

この素朴な問いには、思がけないほどたくさんの答えがあります。服飾が社会の影響を受けながら、人間の身体をより美しく表現するものとして変化していったのはもちろんのこと、暑さ、寒さへの対応や、装飾願望、変身願望、さらには隠蔽、顕示といった精神的な理由が複雑に絡み合って、私たちは服を着ています。

ここでは、ピアノの練習や演奏において、どのように服飾が関わってきたかを見ていきたいと思います。

Rococo ロココ・スタイル

1715年―1789年

ピアノ音楽史でも この時期のフランス音楽をロココ時代としています。また、バッハやヘンデルが活躍した後期バロック時代から古典派のモーツァルトの時代までとなります。

フランスのヴェルサイユ宮殿の宮廷衣装。優雅で装飾性に溢れたドレス。

『ローブ・ア・ラ・フランセーズ』と呼ばれ、ウエストを理想的な細さにするために上半身をコルセットで締めつけ、さらに、スカート部分を左右に膨らませるために藤の骨組みが入ったパニエを腰につけています。

フランスの宮廷舞曲であったメヌエット（バッハやヘンデルの作品も同様）は、この重たく巨大なスカートを身につけ、優雅にゆったりとしたテンポで踊られました。メヌエットを練習するときには、女の子はこの衣装を着て王様と踊る自分を、男の子は女王様をエスコートしている自分をイメージしながらテンポを設定してみましょう。フランスのロココ時代の作曲家にはクープランと、《かっこう》で有名なダカンがいます。

ドレス 1770年代後半
©京都服飾文化研究財団、
畠山崇撮影

Empire エンパイア・スタイル

1790年―1830年

ピアノ音楽史では古典派になります。ベートーヴェンは1792年にウィーンでデビューし、1827年に没しています

1789年のフランス革命後、古代ギリシャ・ローマを理想とした新古典主義（美術史や服飾史での呼び方）が現れました。コルセットやパニエを取り去った体を締めつけないドレスは、ナポレオン皇帝の時代に流行したので、エンパイア・スタイルと呼ばれます。素材は、白木綿製のモスリン（薄地で柔らかい織物）で、白糸による刺繍が施されています。このような裾が床を引きずる形のものは、儀式用です。

このドレスの直線的なシルエットを感じながら、古典派の整然としたソナタ形式を正しいフレーズで表現したいですね。

1802年には、ベートーヴェンがピアノ・ソナタ《テンペスト》を完成させています。

ドレス 1802年ごろ
©京都服飾文化研究財団、
畠山崇撮影

Romantic ロマンティック・スタイル

1830年―1850年

ピアノ音楽史では前期ロマン派で、ショパンがパリデビューしてから没するころまでです

大きく膨らませた袖、ロココ時代のように細いウエスト、たくさんのギャザーが寄せられた釣鐘型のスカートによるロマンティックなデイ・ドレス。

ショパン先生には約150人の弟子がいましたが、そのほとんどがこのドレスを着用した超お嬢様たちでした。完全に脱力をしてワルツやノクターンを弾けるように、厳しいレッスンが行われました。このドレスでは特に姿勢を正し、無駄な力を抜かないと、優雅な音をていねいに奏でることはできません。なぜなら、ウエストの拘束が強いのはもちろんのこと、袖がかなり膨らんでいるため、腕の動きを抑制してしまうからです。この写真を見てお嬢様たちの姿を想像してみてください。きっといつもより美しい音色になると思いますよ。

デイ・ドレス 1838年ごろ
©京都服飾文化研究財団、
畠山崇撮影

Bustle バッスル・スタイル

1870年―1890年

ピアノ音楽史では、後期ロマン派から近代の初期になります。リストやブラームスの時代に当たり、ブルクミュラーの晩年、ドビュッシーが活躍を開始したころです

このスタイル以前には、1850年―1870年のクリノリン（Crinoline：スカートを大きく膨らます丸型の鳥かごのような骨組み。ほとんどは柔らかい鋼でつくられていた）・スタイルが流行しました。バッスルは、このクリノリンが変化し、「腰当て」によってスカートの後ろ側を強調したスタイルです。ティーカップが乗っかるほど膨らませ、中には装飾が過剰すぎて座れないドレスまでありました。

ブルクミュラー『25の練習曲』の第25番、《貴婦人の乗馬》に登場する女性のイメージにピッタリです。また、ドビュッシーの《2つのアラベスク》も、このころに作曲されました。1868年に始まった明治時代、鹿鳴館での舞踏会で、日本で初めて洋装した女性たちが着用したドレスも、このスタイルでした。

シャルル=フレデリック・ウォルト
レセプション・ドレス 1883年ごろ
©京都服飾文化研究財団、
畠山崇撮影

「ピアノ音楽史で見る服飾の歴史」、いかがでしたか？

ピアノを練習するときに、指使いやフレーズ、ダイナミックス、さらに時代ごとの様式を楽譜からしっかりと読み込むことはとても大切なことであり、当然のことでもあります。それと同時に服飾の時代ごとの変化を見ることによって、その曲が作られたとき人々がどのような生活をしていたのかを知り、曲の理解を深め、イメージを膨らませ、よりよい演奏することができるのではないでしょうか。曲のテンポ設定にも衣装の大きさ、重さ、機能性が影響していることはとても興味深いことです。また、ほとんどの時代で女性のスカートが大きく広がっていることは、連弾をするときの姿勢や座り方にも影響を与えました。ぜひ生徒さんたちと一緒にそれぞれの時代の衣装を鑑賞し、楽しい夢のあるレッスンをしていただきたいと思います。